

視察先別報告 東ティモール

【無償資金協力】

ディリ港改修計画

概要

ディリ港は、首都ディリに位置する東ティモール唯一の国際港湾であり、生活物資の85%を輸入に依存する同国にとって重要な物流の拠点となっている。しかし、老朽化や塩害によって埠頭棧橋の床板の陥没や梁の破損が生じているため、大型船舶の同時碇泊が1隻に限られるとともに荷役の効率や安全性が低下し、本来の機能が果たせない状況にあった。この状況を改善するために実施された、港湾改修工事プロジェクト。

01

大浦 正人 無償資金協力において、最もイメージしやすいODAではないかと思えます。視察前は、わずか9億2200万の資金でどれ程の港湾整備が出来たのか疑問でした。びっくりしたのは、わずかそれだけの資金で、この港全体の殆どを修繕整備した事です。現在運輸通信省港湾局では、大西専門家の他にドイツ人が港湾アドバイザーとして技術協力しています。ドイツ人アドバイザーは組織作りについての支援をしているそうです。現時点で港湾における支援は日本とドイツが行っているという事です。今後新しい港が整備される話を聞きました。政府と民間のコラボレーションで行われるようです。残念ながら日本の関わりは無いだろうと思われます。それでも、これまでに急激に物流を発達させることができたのは間違いなくこの事業のおかげだと思えます。

02

太田原 奈都乃 ディリ港改修計画は、一般の人には見えにくい。だが実は東ティモールの国全体、人々の生活根底を大きく支えているものだ。老朽化や塩害によって破損した棧橋・梁の改修は、一隻だった大型船舶の同時碇泊が三隻まで入港可能になり、より安全で効率的にした。国内唯一のディリ港に対するメンテナンスフォローとその成果に、私は感銘を受けた。三日間の視察の中で出会った様々な現地の人々の日々の生活が、この物資輸送から始まるのだと思うと、ディリ港の無償資金協力の成果の大きさを改めて感じた。そしてここで、国際協力において何かを新しくつくることとその後状況をより良く保つことが同じ位、困難であり、重要なことであるのだと学んだ。
また空のコンテナが出港していく様子には、生活物資の85%を輸入に依存する一方、輸出品目が少ないという現実を目の当たりにした。

03

川辺 絵梨 無償資金協力により改修されたディリ港は、東ティモールの経済発展に大いに役立っていると説明して下さった港湾アドバイザーの大西専門家。また、港湾局の局長からも、日本の支援に対する感謝の意を表すお話を伺うことができた。しかし、日本の協力により改修されたことを、一般市民は知らないようだ。一般の方が気軽に入れる場所ではないので仕方がないのだが、生活物資の多くを輸入に頼っていることを思うと、知っていて欲しいと思った。ちょうどコンテナを船積みしている現場を見ることができたが、輸入過多で空のコンテナを戻すことが多い現状。今後のさらなる発展により、荷物のたくさん詰まったコンテナが、ディリ港から世界に運ばれることを期待する。

04

木村 みゆき 自給しているものがほとんどなく輸入に頼っている現状において堤防が改修されて物流が栄え、GDPは右肩上がりになった東ティモールの経済発展に欠かせない事業でした。協力期間が終了した後もメンテナンスを行っているケースです。大西専門家（港湾アドバイザー/本邦所属、国交省）の人柄とその技術の高さは国際協力の最前線の現場で貢献する日本人としてとても誇らしく思いました。補修が必要な堤防が見てとれた事、新しい港の建設に日本のODAが参画していないことは残念に思いました。

05

後藤 恵美

ディリ港湾を案内して下さった大西専門家の大きな声と笑顔が今も私の頭から離れない。「自分の知識や経験を必要としてくれる国があれば喜んで行く」、「このプロジェクトの話聞いた時に俺がやらなくて誰がやる、と思った。」、「人々の生活の役に立っているという誇り」明るくポジティブな言葉の裏には、どれほどのご苦労があったのだろうと推測しながら、完了したプロジェクトの成果を見させていただいた。効率的で活気に溢れるディリ港湾を見て回り、現地従業員の方々が笑顔で大西専門家に語りかける様子を見て、このプロジェクトが東ティモールの方々にとって大きな意味を持っていることを実感することができた。

06

塩澄 志麻

これぞ、ODA。目に見えるインフラ整備を行い、東ティモールの経済活動に寄与している取り組みだ。このディリ港は、生活物資の85%を輸入に頼る東ティモールのまさに心臓とも言える場所だ。ディリ港はもともとあったが、老朽化していた。それを、日本の技術と資金で改修した。事業が終わった後も、「港に都市的要素を入れたらどうか」と現地スタッフにアドバイスを行っている。港を改修し終わっても日本の国際協力は終わらない。ここまで、ODAがアフターフォローを行っていたことに驚いた。

07

武田 義久

生活物資の85%を輸入に依存している東ティモールにとって、ディリ港は物流の重要なポイントとなっている。運輸通信省港湾局長が、日本政府に対しての感謝の意を表明され、大西専門家との信頼関係を感じた。また、港では、コンテナの荷揚げ作業を目のあたりにしたが、その光景は、日本では考えられない状況であった。そこで、荷揚げ作業をしているコンテナは送り返される時には中身が空であることを聞き、輸出市場拡大が課題であると感じた。しかし、埠頭そして日本政府からの無償資金協力で整備されたディリ港により、大幅に輸出入量が増大した。間違いなく日本の目に見えるインフラ支援が東ティモールの国民の生活に、そして経済発展を支える要因として大きく影響し、支えているということを感じた。

08

田中 香織

間近でコンテナを船に積みこむ様子を見学させていただき、スケールの大きさを実感できた。特に設備がまだまだ原始的であるため、コンテナが手動で吊りあげられ船体や港にガンガンと物凄い音を立てながら衝突する姿には唖然とした。せっかく作り上げたものだからこそ、長く使うためには現地の方々が自分たちで丁寧に扱っていくことが大切だと実感した。しかし現地職員の方は横浜での研修を経験されていたため、ディリ港にはまだまだ整備が必要だという点を理解しており、いつかは日本の港のようにしたいという熱い思いを持って働いていたのが印象的であった。現地での指導だけでは、その場所しか経験したことのない人々によりよい姿をイメージさせるのはなかなか難しいため、日本での研修は大変有効ではないかと感じた。

09

藤島 誠人

この案件は、もうすでに終了しており、その後の動向を視察した。ディリ港は、東ティモール唯一の国際港湾であり、生活物資を85%輸入している東ティモールにとって大きな役割をもつ。この港では、日本の技術の高さを感じた。それは、以前まであった港のところと日本が改修したところを比べると歴然とした差が出ていた。綺麗さはもちろんのこと、積荷作業の時の安全性を考えた造りになっていた。また、課題もたくさん存在していた。その1つとして東ティモールは、ほとんどを輸入に頼っているが自国から輸出できる物がほとんどないことだ。だから、このディリ湾に入ってくるコンテナはすべて中身が入った状態だが、送り返す際のコンテナの中身は空っぽである。今後、輸出品を確立していくことがディリ港の活性化にも繋がると感じた。

10

藤岡 裕巳

東ティモールと外をつなぐディリ港。ここがなかったらこの国の今の生活は存在しないと感じた。輸入が主で生活の基盤となる物資のほとんどがこの港から発信されていることを知った。しかし、主な輸出品はコーヒーだけということであまり淋しい気がする。せっかく国際港という受け皿があるのに、物資を受け入れるだけではなく、国の産業物として発信できる何かを作らないともったいない気がした。大量に物を輸送するには船は有効な手段だと考える。他にも例えば、観光に力を入れた取り組みを行い、物ではなく人の輸送場としてディリ港が活躍できるのではないかと少し感じた。船の近くに行き、荷物を積む現場を見させていただいた。重いコンテナを機械で数名のスタッフにより船に積んでいる姿を見ることができた。こういった光景は日本でも普段見ることができないため、よい経験となった。